登場人物

野上　美子（２５）	百々霧村の地域おこし協力隊。
野上　大志（２５）	男になりすました美子。
成田　涼（２５）	百々霧村への移住者。
成田　アリス（２５）	女になりすました涼。
甘利　和一（７５）	百々霧村の村長。
甘利　房江（７３）	村長夫人。
伊藤　いづみ（６８）	百々霧村の住人。商店店主。
上野　源三（６９）	百々霧村の住人。元大工。
江川　ヨウ（８０）	百々霧村の住人。痴呆気味。
小野田　為吉（６５）	百々霧村の住人。飲んべえ。
小野田　健太郎（６）	為吉の孫。
小野田　百恵（３６）	為吉の娘。健太郎の母。出戻り。
吉本　聡（３５）	百々霧村への移住を検討中の都会人。
吉本　葵（３３）	聡の妻。
タクシー運転手の男	
配達員の男	
女性アナウンサー	
田んぼの持ち主夫妻	

○美子の実家・美子の部屋（昼）

外は雨が降っている。

カーテンを閉めた薄暗い室内。

家具や小物はピンク系で女性らしいものばかり。

部屋着姿の野上美子（２５）、ローテーブルに向かい、履歴書を書いている。

氏名欄以外（性別は男、写真は男装、職業欄は商社を半年前に退職、等）を最後まで埋め終えて、氏名欄に戻り、

『野上』まで書いて手が止まる。

別の紙に『野上美子』と書いて、『美』の上の『羊』を塗りつぶす。

『子』の上に『し』とふりがなを振る。

『し』と読む字の一覧をスマホの予測変換で出して、『志』を選ぶ。

『子』を塗りつぶして下に『志』と書く。

履歴書に戻って、『大志』と書く。

『のがみたいし』とふりがなを振る。

スマホで『百々霧村　地域おこし協力隊』と検索して、履歴書の送付先住所を封筒に書いていく。

スマホカバーがピンクのハート柄であることに気づいて、外して、ごみ箱へ放る。

ごみ箱には『性暴力被害者を支援する会』の冊子が入っている。

封筒に履歴書を入れて、封緘する。

それをローテーブルに置いておいて、外出着に着替え始める。

雨が止み、カーテンの間から封筒に光りが射す。

○百々霧村・野上家・茶の間～玄関（朝）

季節は初夏。

縁側のある茶の間。

ちゃぶ台の上に『合同移住相談会　参加要項』と書かれた封筒が置いてある。

リュックを肩にかけてスマホを耳に当

てた野上大志（２５）が入ってきて、

大志「だから俺、一週間前に確認したじゃないですか。昨日も聞きましたよね？」

と、封筒を掴んで出ていく。

大志「そしたらアンタ、『わかった、わかった』って。え？　じゃあなにを『わかった』って言ったんですか。……え、わかんないです。『六人乗りの車』ってネットで検索して、絶対その画像出てきませんよ？」

と、廊下を玄関まで歩いてきて、立ったまま靴を履き、玄関を出る。

○野上家・外観（朝）

二階建ての古民家。

大志の声「違います、ネット社会とかじゃなくて」

○同・玄関～家の前の道（朝）

大志「いやいいです、いいです。そんな時代の写真とか見せられたって、だからなにっ

て感じですよ？」

と、玄関に鍵をかけて振り返る。

家の前の道に軽トラが停まっている。

その前に立つ甘利和一（７５）、ガラケーを耳に当てながら手を振っている。

荷台には段ボール箱や丸めたポスターと一緒に伊藤いづみ（６８）、上野源三（６９）、江川ヨウ（８０）、小野田為吉（６５）が乗っており、腕を組んで寝ている源三以外、手を振っている。

いづみ「おはよー大志くん。今日もイケメンだねぇ」

大志、電話を切って軽トラの方へ歩いていき、わざとかしこまって、

大志「おはようございます、甘利村長、百々霧村村おこし執行部の皆さん。朝っぱらから残念なお知らせですいませんが、俺、軽トラは運転できないんで、アンタらでなんとかしてくださいね」

と言って、荷台へ上がる。

和一「まーまー、そう怒るな怒るな」

いづみ「村長が牛歩の運転でのんびり連れてってくれるって」

為吉「それか、俺がかっ飛ばしてもいいけどよ」

大志「どっちも嫌だから、俺が運転したかったんですけどね」

為吉「だったらお前、オートマ限定ってこたねぇだろ。（冗談で）チンコついてんのか？」

車が動き出す。

○百々霧村・村内を走る軽トラの上（朝）

ヨウ「免許があるだけ偉いよ。あたしなんて持ってないのよ」

いづみ「ヨウちゃんとこはお舅さんが厳しかったもんね。『女に運転なんてできるはずない』とかさ。ほんと失礼しちゃう」

為吉「でもアレだろ、ヨウちゃん。あの武勇

伝聞かしたれよ大志に」

ヨウ「あっ、そうなの。あたしね、免許は無いんだけど、お舅さんの車こっそり運転して、国道でイノシシ轢いたことがあるの」

為吉「で、晩飯がイノシシ鍋になったんだよな」

いづみ「毛皮も売れたのよね」

ヨウ「うふふ。まだ二十代の頃よ」

大志「（為吉へ）普通に犯罪ですね」

為吉「もう時効だろ、こんなババアんなって」

大志「（独り言で）言い方……」

いづみ、ふと気になって、

いづみ「ねぇちょっと、源さん、ちゃんと生きてんのかしら」

大志「死んでるとか勘弁ですけどね」

大志、源三の肩を叩こうとする。

すると源三、バチッと目を開けて、

源三「生きとるし、起きとるわ。うるさくて寝れやせん」

大志、苦笑。

ヨウ「あ、見て、西の方。大きな雲」
皆、西の空を見る。
大きな雨雲がある。
いづみ「あら、ほんと。追いつかれるかしらね」
為吉「こりゃ帰りはタクシーだな」
大志はスマホで降水確率を見る。
すると、午後から１００％になっている。
大志「（独り言で）なんで軽トラなんだよ…」

〇町のイベント会場・外観（夕）
大雨が降っている。

〇同・玄関（夕）
合同移住相談会の看板が立っている。
搬出物を持った関係者たちがぞろぞろと出てくる。
大志、タクシーの後部ドアから中を覗

き、乗っているいづみ、源三、ヨウ、
為吉へ、
大志「じゃあ、また後で」
いづみ「ありがと。村長にかっ飛ばせって言いなね」
ヨウ「もうちょっとちっちゃかったら、ここ（膝の上を叩いて）乗してあげたのに」
為吉「大志、大志。着いたらコレな（と、おちょこをあおるポーズ）」
大志「（呆れつつ笑顔で、三人へ）はい」
大志、タクシー運転手へ、
大志「運転手さん、安全運転でお願いしますね」
と言って外へ出る。
ドアが閉まり、タクシーは出発する。
大志、見えなくなるまでそれを見送る。

○同・駐車場～町中（夕）
大志、雨の中走っていき、和一の待つ軽トラの助手席へ乗り込みながら、

大志「あーあ」

和一「なんだ、辛気くさい顔して」

大志「楽しそうに乗ってきましたよ」

和一「（苦笑して）まぁ、あいつらはなぁ…」

軽トラの荷台にはびしょ濡れの段ボール箱が積んである。

軽トラが発進する。

大志「かっ飛ばしてくださいね」

和一「荷台が空になる」

大志「どうせいらんでしょう？　今日しか使えない資料の余りですよ。クソほど余りましたね」

和一「クソなんて言うんじゃない、女の子が」

大志「……俺のことまだ、女の子に見えますか？」

和一「最初っからなぁ、女の子にしか見えんよ。……可哀想に」

大志、溜息をつき、

大志「うっかりバラさんでくださいね。墓の

下まで持ってく約束ですよ。あなたも、房江さんも」

和一、納得はしていないが、

和一「わかった、わかった。大志だな、お前は」

○百々霧村・甘利家・茶の間（夜）

大志、和一、いづみ、源三、ヨウ、為吉が集まって酒盛りしている。

大志、立ち上がって出ていく。

○同・台所（夜）

甘利房江（７３）、栓抜きを瓶ビールの蓋に当て、開けようとして、

房江「よっ……あらっ？」

と、失敗する。

小野田百恵（３６）、

百恵「あー房江さん、あたしやりますよ」

と、唐揚げを油から上げていた手を止めて、房江のもとへ。

椅子に座っていた小野田健太郎（６）、
椅子から下りて、この隙に、唐揚げを
つまみ食いしようとする。
房江、百恵に栓抜きを渡しつつ、
房江「ありがと百恵さん。握力っていうの？
年々落ちてきちゃってて」
百恵「まぁ、（蓋を開けて、）そんなもんで
すよ。あたしだって年々――（健太郎が唐
揚げに手を伸ばすのを見つけて）あストッ
プ！　駄目だってまだ熱いから。あと油使
ってるときは近寄らない」
健太郎「ほーい」
と引き下がって、
大志「なんかやることありませんか？」
とやってきた大志へ、
健太郎「あるある。遊ぼ。キャッチボールし
よ」
大志「え、外すごい雨なんだけど」
房江「大志くん、唐揚げ持ってってくれる？
健ちゃん、向こうで一緒に食べてきな」

と房江、唐揚げを皿に持って大志に渡す。

健太郎「わーい、行こうぜ大志」

と、駆けていく健太郎。

百恵、その背に、

百恵「大志〝くん〟でしょ。あと、唐揚げ三つまでだからね。聞いてんの？（大志へ）ごめんね、ほんとぉ」

大志「（笑って）言っときますね、唐揚げ三つまで」

百恵「あっ、じゃあついでに、うちのお父さんにも飲み過ぎるなって言っといて。ほんっと最近飲んでばっかで、あのハゲ」

○同・茶の間（夜）

為吉、愉快に笑いながらハゲ頭を掻く。

○戻って、同・台所（夜）

大志「（苦笑いで）了解です」

○同・廊下（夜）

唐揚げを持って茶の間へ向かう大志。

階段の傍を通ろうとして、階段に健太郎が座っているのに気づいて立ち止まる。

大志「おうっ……びっくりした。なんでこんなとこいるんだよ」

健太郎、自分の横をトントンと叩く。

大志、訝しみながら、

大志「（笑って）え？　なになに？」

と、そこへ座る。

健太郎、大志の顔をじっと見ると、その頬に人差し指をグイッと刺して、

健太郎「変（＝嘘笑いするなよ）」

大志「え？」

健太郎「大志のバーカ」

大志「（なんだよ、と思いつつ）健太郎のバーカ」

健太郎「ターコ」

大志「ターコ」

健太郎「ハーゲ」

大志「ハーゲ」

健太郎「うっそわーらいー」

大志「うっそわら、いじゃないし別に」

健太郎「へー、じゃあなんでニコニコしてんの？　今日、駄目だったんでしょ？」

大志「駄目ってことはーー」

健太郎「はい嘘ー」

大志「嘘じゃないって。ブースに来て話聞いてくれた人の中で、何人かは、百々霧村良さそうですねーって言ってくれたし。だから、こうやって続けてれば、そのうち何人か引っ越してきて……健太郎くらいの子どもだって、そのうち……ね、そしたら……友達も」

茶の間の方から馬鹿笑いが聞こえてくる。

健太郎、大志をじっと見つめていたが、

健太郎「（嘘くさいなと思いながら）ふーん……わかった」

と言って、唐揚げを一つ取る。

大志「あ、待って待って、熱いって」

健太郎「だいじょぶだよ。いくつだと思ってんの」

大志「（苦笑気味に）うーん、六歳？」

健太郎「（唐揚げを食べながら）そうだよ。来年から小学校行くんだからな」

大志「へぇー、そりゃー立派な大人だわ」

大志、唐揚げを一つ齧ろうとして、

大志「あっつ。待って、これやっぱり熱いだろ」

健太郎「大志は子どもだな」

と健太郎、二つ目の唐揚げを取っていく。

大志「（お前に言われたくない、と思いつつ、ふと思い出して）あ、健太郎。唐揚げソレと、あともう一つな。三つまでって百恵さんがー―」

○使われていない灯台のある岬（夜）

雨が降っている。
傘と雨合羽で正体不明の女（美子）が灯台へ歩いてくる。
足にはヒールを履いていて、雨と泥跳ねで汚れている。

○使われていない灯台・外（夜）
女、辺りに人がいないのを確認し、ダイヤル式の鍵を外して、中へ入る。

○同・下部（夜）
中は真っ暗。
女、傘を置き、螺旋階段を上っていく。

○同・上部（夜）
上がりきって、灯体のある部屋へ出る。
置いてあったＬＥＤランタンを点けて、雨合羽のフードを下ろす。
美子「ふぅ……」
ここでようやく顔が見える。

美子、雨合羽のポケットから、小さなアマガエルを入れたビニール袋取り出して、適当に置き、雨合羽を脱ぐ。
下にはピンク色のワンピースを着ている。
美子、布で覆って隠していた虫籠を出してくる。
中にはムカデが入っている。
美子「（慈愛に満ちて）おはよう。元気？」
美子、ムカデの動きをじっと見る。
やがて、カエルの入ったビニール袋の口を開けて、ビニール袋を手袋のように使ってカエルを掴み、
美子「今日のはねぇ、ちょっと小さめかなぁ」
そのまま虫籠の中にカエルを入れる。
ムカデ、じわじわとカエルを追い詰め、
やがて巻きつく。
その様子を眺めている美子。
初めは楽しそうに、次第に無表情になっていき、

美子「（他人の台詞として、カエルへ）『可哀想に。雨の夜になんか出歩くからこんな目に遭うんだよ』」

しばらくして、ムカデがアマガエルの残骸から離れていく。

美子、割り箸を取り出して残骸を掴み、バルコニーへ向かう。

○同・バルコニー（夜）

手摺りまで出てきて、真下を覗き、残骸を捨てる。

顔を上げてふと、岬の際に、成田涼（２５）が海を向いてびしょ濡れで立っているのを見つける。

美子、なにあれ、と思ってじっと見ているが、いつの間にか無意識に、

美子「飛び込め……飛び込め……（男なんか死にたきゃ死ねばいい）」

と呟いている。

そのうちハッと我に返って屋内へ入る。

○同・上部（夜）

虫籠を元通りにし、雨合羽を着る。

○同・下部（夜）

螺旋階段を下りてきて、傘を取って、扉を開ける。

○同・外（夜）

涼のいた場所にはもう誰もいない。

美子、冷静に、涼の姿を目で探すが、辺りにいないとみると、扉を振り返って鍵をかける。

○野上家・外観（昼）

スマホの着信音が大音量で鳴っている。

○同・茶の間（昼）

ちゃぶ台の上でスマホが鳴っている。

家のどこかからバタバタと近づいてく

る足音がして、

大志「はいはいはい、ちょっと待ってー」

と大志、茶の間へ入ってきて電話に出る。

大志「はい、もしもし？　（終始半笑いで）え、マジですか、あの家？　誰が買ったんです？　え、わかんない？　ちょっとぉー」

○百々霧村・一部の光景（昼）

天気が良く、花の間を蝶が飛んでいる。

○同・村の入り口（昼）

『百々霧村』と書かれた丸太看板がある。

タクシーが停まって、運転席から運転手の男が出てくる。

男、車の後ろへ回り、トランクから女物のキャリーバッグを取り出す。

次に、後部座席のドアを開ける。

タイトスカートを履いてサングラスを

かけた成田アリス（２５）が出てくる。
アリス、サングラスを外し、顔周りの
髪が鬱陶しそうに首を振る。
周囲の緑を見て、
アリス「はぁ……眩し」
運転手の男「それじゃあ、どうも」
アリス「ええ、どうもありがとう」
とアリス、満面の笑み。

○伊藤商店・外観（昼）

○同・店内～店先（昼）

いづみとヨウ、和菓子の寒天ゼリーを
食べながら世間話をしている。
いづみ「でね、その若先生に教えてもらった
んだけど、なんかボケ防止に良いらしくっ
てぇ、（ゼリーを置いて実際にやりながら）
まずね、両手を、手のひらを自分に向けて
前に出す。ほらやって」
ヨウ「ふんふん、（ゼリーを置いてやってみ

て、）こーお？」

いづみ「そう。いい感じ。プロ級。でね、

（やりながら）右手の親指を、曲げる」

ヨウ「（やりながら）ふんふん。で？　で？」

いづみ「こっからよ。いーい？　一から十まで数えながら、右手は人差し指から、左手は親指から、順番に曲げてくの。で、小指まで曲げたら、今度は、小指から、上げてく。最終的に、最初と同じ手の形になるの。

（両手を見せて）これね？」

ヨウ「うーーーーーん（わかんない、と）」

いづみ「まいいや、やってみるから、ちょっと見てて。（やりながら）いくよ、せーの、

一、二、三、四、五、六、七――」

その時、キャリーを引いたアリス、店先に突如現れて、

アリス「ごめんくださぁい」

いづみ「（八と言おうとして）は、ぁあー、うん？」

と、ヨウと共に店の入り口を振り向く。

にっこり笑うアリス。
唖然とするいづみとヨウ。

○小野田家・台所（昼）
為吉「百恵のやつ、どこ隠したんだよ」
と為吉、酒を探してあちこちの戸を開けている。
だがどうしても見つからず、大声で、
為吉「健太郎ー、健太郎ー」

○同・庭（昼）
健太郎、蟻を眺めている。
為吉、縁側へやってきて、
為吉「健太郎、ちょっとじいちゃん、買い物行ってくるな。行くか？」
健太郎「（蟻を見たまま）ううん」
為吉「じゃあ、菓子は？　何がいい？」
健太郎「（蟻を見たまま）ヒャクアシ戦隊ムカデレンジャーのチョコウエハース」
為吉「あー、あるかなぁ（ねぇだろ、と）」

健太郎「無かったらなんでもいいよ。あ、でも、砂糖がついたゼリーみたいなやつと、酢昆布はやだ」

為吉「あー、よし、じいちゃんに任しとけ」

と言う為吉の尻ポケットには都こんぶの小箱が差してあり、為吉、後ろ手にそれを押し込む。

○伊藤商店へ向かう道（昼）

都こんぶを食べながら歩く為吉。

すると、道前方に、スマホと周囲を見比べているアリスを発見。

為吉、立ち止まり、

為吉「うん？　誰だありゃ」

アリス、為吉を見つけ、パッと笑顔になる。

為吉、ぎょっとして目をしばたく。

○上野家・縁側～仏間（昼）

源三、問題集片手に将棋盤に向かい、

詰将棋をしている。
玄関チャイムが鳴る。
源三「（めんどくさそうに）うーん」
と源三、立ち上がり、仏間を通って廊下へ出ていく。
仏壇には亡き妻の写真がある。

○同・玄関（昼）
源三、廊下を歩いてきて玄関へ下り、戸を開ける。
アマゾンの箱を持った配達員の男、
配達員の男「あ、どうも、お届け物です」
源三「（不愛想に）あー、はいはい」
源三、靴箱の上のシャチハタを取って、蓋を開ける。
配達員の男「ここにお願いします（と、押す場所を指す）」
源三、言われるまま印を押す。
配達員の男「はい、じゃあこちら（と、荷物を渡して）。どうも、ありがとうございま

したぁ」

と男、会釈をして去っていく。

源三、戸を閉めて、上がり框に荷物を置き、その隣に座り

源三「なんだこれ。覚えがない」

と、封を開ける。

すると中には、ヒャクアシ戦隊ムカデレンジャーのチョコウエハースが十個と、ショッキングピンクのショップ袋に入った何か。

源三「菓子と……ん？」

源三、ショップ袋を開ける。

すると中には黒のブラジャー。

源三、ぎょっとして、箱の宛先を確認する。

○小野田家へ向かう、林の傍の道（昼）

源三、ガムテープで梱包し直したアマゾンの箱を持ち、むすっとして歩いている。

すると、道の前方にキャリーが置いてあるのを見つける。

源三「ん？」

と思って立ち止まっていると、突然、そのキャリーの傍へ、林の中からアリスが出てくる（立ちションしてた）。

アリス、源三を見つけると、ニコッと微笑む。

源三、目を見開き、衝撃を受けた顔

（なんだこの美女は、と）。

○甘利家・外観（昼）

源三、アマゾンの箱を持ったまま小走りでやってくる。

○同・庭（昼）

源三「おい、おい、和さん、いるか？」

と源三、駆け込んでくる。

縁側には和一のほか、いづみ、ヨウ、為吉もいて、全員が一斉に源三を振り

向く。

○野上家付近の道（昼）

健太郎、蟻が集団で餌を運ぶのを見ている。

キャリーとヒールの音が近づいてきていて、やがて健太郎の視界に人影が落ちる。

健太郎、顔を上げる。

アリス、しゃがみ込み、健太郎に微笑みかける。

アリス「こんにちは。ちょっと聞いてもいい？」

健太郎、目をぱちくり。

○野上家・茶の間～庭（昼）

大志、ノートパソコンに向かい、村のブログを書いている。

すると庭へ健太郎が駆けてきて、

健太郎「やっほー大志ィ」

ぴょん、と縁側へ座る。

大志「おお健太郎。どうした？」

健太郎「お客さん」

と、玄関の方角を指差す。

大志「お客さん？」

大志、庭に下りて玄関の方を覗く。

キャリーを脇に、アリスが玄関の方を向いて立っている。

大志、場違いに都会風なアリスの姿にぎょっとして、いったん家の影に隠れ、

大志「誰だって？」

健太郎、足をぶらぶらさせながら、

健太郎「アリス」

大志「アリス。苗字は？」

健太郎「知らない。引っ越してきたんだって、大志んちん隣に」

大志「あー、なるほど（例の、と）。なんか言ってた？」

健太郎「なんかって？」

大志「名前の他に」

健太郎「うーん……『蟻はね』」

大志「蟻」

健太郎「『蟻はね、雨が降ると道に迷って、おうちに帰れなくなっちゃうのよ』って」

大志「はぁ（なんじゃそりゃ、と）」

大志、もう一度玄関の方を覗く。

すると、アリスがちょうど大志の方を振り向き、互いの目が合う。

アリス、にこりとして手を振ってくる。

大志、顔をこわばらせて会釈する。

○成田家・外観（昼）

道沿いに『軽食・コーヒー　みやこ』と書かれた古い手作り看板が立っている。

○同・家の前（昼）

和一を先頭に、アリス、源三、いづみ、ヨウ、為吉、大志、健太郎が家の裏から出てきて、

和一「こりゃ駄目だ。今日からなんてとても
じゃないが」
アリス「どうしても？　アタシ、屋根さえあ
ればいいんだけど」
和一「（蚊を払うような仕草で）あーあー
（無理無理）、野郎ならともかく、こんな
若いお嬢さんじゃあ」
アリス「あ、アタシ、そういうの全然平気」
和一「（また蚊を払うように）あーあーあー
（ダメダメダメ）、そりゃ痴漢は出んが、
マムシもムカデもサソリも出るぞ」
大志、健太郎にこっそり、
大志「サソリなんか出んのか？」
健太郎「出るわけないじゃん。帰らせたいん
だよ」
大志、怪訝な顔。
和一「成田さん、だったな。申し訳ないが、
今日はいったん帰ってもらって、家の修理
の話は、またこっちから電話するんで」
いづみ「村長、異議あり！　帰れだなんて酷

いわよ。ねぇ為さん？」

為吉「おうよおうよ。はるばる東京から来たってぇのに冷てぇ。なぁヨウさん？」

ヨウ「うんうん可哀想。アリスちゃん、おうち直るまで、あたしのうちにおいでよ」

いづみ「うちでもいいよ。大歓迎」

為吉「俺んとこも……たぶん、百恵に聞いてからだけど」

健太郎「（独り言として）無理無理」

和一「そう簡単に言うがなぁ。あー源さん、これ全部直すのに、本職呼ぶといくらかかる？」

源三「少なく見積もって、三百万」

ヨウ「（驚いて）そんなに？」

為吉「たっけーな」

いづみ「ゼロいくつ？　（と、指を使って数えて）」

大志、健太郎にこっそり、

大志「デタラメだろ？」

健太郎「これはたぶんほんと。源さんは元大

工だから」

アリス「三百万もするのね。この家、十五万で買ったのに」

和一「あー、だからな、私んらもなんで売れたんかって、不思議でしょうがなかったんだが……（改まって）成田さん、ほんとにここに住めるかい？　この家もそうだが、この百々霧村に。今日初めて来たんだろう？　なんも無いとこだろ、ジジババばっかで？　三百万、仮にアンタが払えたとしても、こんないきなりパッと来て、よく知りもせずにそんな大金、使わせるには気が重いよ」

全員、言葉を無くして、気まずい沈黙。

大志だけが、何か言いたくてモヤモヤしている。

やがて、

いづみ「確かに、村長の言う通りだよ」

為吉「だよなぁ。こんな味も素っ気も無ぇ村、東京のネエチャンじゃあ、三日で飽きちま

う」

ヨウ「引き止めたら、余計に可哀想だよね」

和一「ってことでなぁ、成田さん、悪いことは言わない、一度帰って、よく考えてから……なあ？」

アリス、言おうかどうか迷ってから、

アリス「アタシ帰る場所無いの。全部、捨ててきたから」

全員、何も言えなくなる。

大志、ああこの人は自分と同じだ、と思い、やがて、アリスの言葉に対して誰も返答しない空気に我慢できず、

大志「あーあーもうアホだろアンタら、ほんとジジババ、そうやってうだうだ」

全員、驚いて大志に注目している。

大志「あんま言いたか無いけどね、アンタらのそういうのは、優しいんじゃないからな？　適当なんだよ、ブレブレなんだって。その場の空気で泊めてやるって言ったり帰れって言ったり。村長もだかんな？　アン

タタチ悪いよ。ハナからこの人帰らすつもりで。そんなんだから……アンタらそんなんばっかだからさ、いつまで経ったって相談会はお遊びだし、村に人だって来ないし

（打撃音がして）痛って！」

大志の足に、健太郎が蹴りを入れたのだった。

健太郎「やめろよ、それ以上は弱いものいじめたぞ」

老人たち、項垂れている。

アリスもまた同様に。

大志、ああしまったと思うが、次の言葉が見つからない。

気まずい沈黙。

鳥の鳴き声が聞こえてくる。

源三、思い切った風に顔を上げて、

源三「三ヶ月、かかっていいなら、普通に住めるくらいには直せる」

いづみ「なに、源さんが直すの？」

源三「一人でできるもんか。だが何人かいれ

ば、恐らく、金も四、五十万程度で」

為吉「そら本職に頼むよか安いわな」

ヨウ「（迷ってから）あたし、手伝うよ！」

いづみ「（え？　とヨウを見てから）あ、あたしも！」

為吉「（ヨウといづみを見てから）じゃあ、俺もやるか。棟梁が仕切るってんなら間違いねぇだろ」

和一「おいおいおいおい、お前さんらなぁ、出来もしないことを」

いづみ「村長は村長やってりゃいいわよ、それが仕事なんだから」

ヨウ「あたしたちは無職で暇だもんね」

為吉「だな。村おこし執行部だぁ大層なアレで」

源三「その実、名ばかりだ。こんな若造にあまで言われて黙っとれるか」

和一「源さん（やめなよ）」

為吉「よっしゃ！　ってことでアリスちゃん、四、五十万ありゃあ三ヶ月後に家が直る。

どうする？」

アリス、急に振られて言葉に迷う。

するといづみ、アリスの傍に行き、その背を支えるように触れて、

いづみ「どうするもこうするも、無粋だねぇもう（帰るとこ無いって言ってんのに）」

ヨウ「（アリスへ）大丈夫。みんなで一緒に直そうね」

和一「（いづみたちへ）金はどうする？　四、五十万はなんにせよかかるんだろう？」

アリス「あ、それぐらいなら」

いづみ「大丈夫だって」

和一「じゃあ住むとこは？」

為吉「大志んち、ってのはどうだ？」

大志「（不意を突かれて）は？」

為吉「だってよぉ、あらためて考えてみたんだが、俺んちは空き部屋が無い、いづみちゃんちはボットン便所、ヨウちゃんちはコレ（両手でゴキブリの触覚を表して）、放し飼いだろ？」

ヨウ「（悪意無く楽しげに）うん、ゴキブリね。夜中によくカサカサ聞こえる」

為吉「一方よぉ、大志んちは、俺らが地域おこし協力隊用の借家として結構きれいに造り替えただろ？」

いづみ「そうね、防虫対策万全で、トイレも水洗だし。使ってない部屋あるって言ってたわよね？」

大志「そりゃあるけど……冷静に考えてください、俺男ですよ？　しかも、あの……そういう盛り（の年齢）じゃないっすか」

いづみ「（アリスへ）大丈夫だからね、部屋に鍵つけてあげるから」

アリス「ありがとう。でも平気。アタシ柔剣道合わせて五段だから」

　大志、凄っ、と驚きつつ半笑い。

アリス「（大志へ）よろしくね」

大志「（マジか嘘だろ、と思い、言葉にならず）あー……うー……」

○野上家・外観（夕）

カラスが鳴いている。

○同・二階・空き部屋（夕）

部屋の隅にアリスのキャリーが置かれている。

大志、圧縮袋に入った布団を抱えて入ってくる。

開けた窓から外を眺めていたアリス、振り返って、

アリス「ありがとう。重いでしょ」

と、大志から奪い取るように布団を受け取る。

大志、ちょっとびっくりしながら、

大志「あー、あのさ、共同生活のルールっていうの？　決めとかない？」

アリス、布団を壁際に置いて、

アリス「そうね。例えば？」

大志「『互いの部屋には入らない』とか『風呂を覗かない』とか」

アリス「（笑って）それって普通に常識よ。あとは？」

大志「（考えてなくて）あー、飯の時間とか？　取り敢えず晩飯は……（窓の外の日暮れ具合を見て、腕時計を見て）七時ぐらい？」

アリス「……（意外に思って）一緒に食べるのね」

大志「（やや照れているのを隠しつつ）作るのは、当番制で。あ、掃除とかゴミ捨てとか、洗濯……はどうしようかな。まいいや、細かいことは追々決めよう。家事分担できれば俺も楽だし」

アリス「りょーかい。頑張るわ。（苦笑して）料理はちょっと、アタシアレ（下手）だけど」

大志「あー別に俺も、人に食わせてどう（褒められる）って腕じゃないけど。あ、晩飯、なんか好き嫌いとかあったら言ってくれれば」

アリス、大志をじっと見て、
アリス「優しいのね、大志さんって」
大志「（照れ隠しで苦笑して）や、そうかな」
アリス「好きよ」
大志、ぎょっとするが、
アリス「なんでも好き。アタシ好き嫌い無いの」
大志、なんだそっちか、とホッとし、
大志「あー……（力無く）ははっ、了解」

○使われていない灯台のある岬（夜）
雨音の中、美子の鼻歌が聞こえている。

○使われていない灯台・上部（夜）
ワンピース姿の美子、座り込んで、カエルを捕食するムカデを鼻歌混じりに見守っている。
しかし、不意に顔を上げて、外の方を見る。

○同・バルコニー（夜）

傘を差した美子、手摺に近づき、岬の際を見る。

そこには涼がいて、びしょ濡れで海を見ている。

美子「なんだ、飛ばなかったんだ」

○成田家・外（昼）

動きやすい格好で、という指定で集まった大志、アリス、いづみ、ヨウ、為吉、横一列に並んでいる。

源三、その服装を端から順に注意していく（アリスにだけは優しい声で）。

源三「長ズボンに替えろ（半ズボン）、帽子を被れ（頭ノーガード）、靴と靴下履いてこい（キティちゃんの健康サンダル）、軍手持っとるだろ（冬用の手袋）、酔っ払い」

為吉「酔ってねえって、ヒック」

源三「お前さんら、大工の仕事を舐めるなよ」

源三以外「はい、棟梁！」

○百々霧村の豊かな自然（昼）

カッコウの鳴き声が二度する。

○再び、成田家・外（昼）

源三、横一列に並んだ五人へ、順に

（アリスにだけは優しい声で）、

源三「破れとる（ダメージジーンズ）、つばが広すぎるなぁ（肩まで覆う女優帽）、なんでそうなる（オープントゥのスニーカーにショッキングピンクの靴下）、んならさっきのがマシだった（ゴム手袋）、（為吉へ）お前さんは……」

為吉、しゃっくりを噛み殺して、体がビクッとなり、慌てて缶のオレンジジュースをあおる。

源三「……（諦めて）まあいい。始めるぞ」

源三以外「はい、棟梁！　（為吉の）ヒック」

○成田家・外～茶の間（昼）

大志と為吉、割れたり木が腐ったりしているガラス戸を外していく。

源三、マイナスドライバーで畳を剥がし、アリスと二人で外へ運び出していく。

いづみとヨウ、畳の下の腐った床をハンマーで叩き壊していく。

大志と為吉、屋内の障子戸を運び出していく。

源三とアリス、畳の下の床を壊していく。

いづみとヨウ、外へ出された畳を、捨てるためにノコギリで切っていく。

大志とアリス、床を壊した木切れをゴミ袋に回収していく。

いづみとヨウ、ブルーシートを広げる。

源三と為吉、その上にガラス戸を運ぶ。

いづみとヨウ、ガラス戸を包んでいく。

大志とアリス、木切れを回収しながら、

大志「あー腰痛い（と背筋を伸ばす）」

アリス「節々にくるわ（といろんな関節を回す）」

すっと目が合って、小さく笑い合い、

大志「なんて言えないな」

アリス「大先輩方の前ではね」

と二人、外にいる四人を見る。

ちょうどガラス戸を包み終えて、いづみとヨウ、ハイタッチして喜ぶ。

為吉、拍手をしていて、源三、うんうん、と頷いている。

○野上家・茶の間の壁（朝）

カレンダー型の家事当番表が貼ってある。

同居二週目に入っており、今週からアリスが料理、買い物、大志が食器洗い、トイレ・風呂掃除、ゴミ出し、庭の水やり、となっている。

表の欄外に、『※洗濯は各自』とある。

大志とアリスの声「（幼稚園児風に）いただ

きます」

○同・茶の間（朝）

大志とアリス、ちゃぶ台の前に座っている。

アリス、意気揚々と食べ始める。

大志、ゆっくりと箸を取り、料理の惨状を観察する。

卵焼きはほぼスクランブルエッグ状態。味噌汁はわかめが増えすぎてわかめだらけで、豆腐が崩れている。

ウインナーは黒焦げ。

それらにプラス、謎の手作り野菜ジュースがある。

アリス、なかなか食べ始めない大志に気づき、

アリス「あ、やっぱり（料理の酷さが）気になる？　黙ってれば気づかないと思って」

大志「（気を使って）あー、いや。許容範囲かな」

大志、箸を持ったままもう一度いただきますのポーズをして、

大志「（味噌汁を飲み）うん。（卵焼きを食べ）うんうん。（ウインナーを食べ）うんうんうん。あー全然、見た目はともかく味は全然」

と、油断して野菜ジュースを飲み、

大志「（声にならない）！」

あまりの不味さに立ち上がり、駆け出ていく。

アリス、大志の姿を見送り、不思議そうに首を傾げて、野菜ジュースをごくごく飲み干し、

アリス「っはぁ……おいし（と笑顔）」

○成田家前の道～成田家・外（朝）

成田家へ向かう大志とアリス。

大志「（腕時計を見て）ちょっと早かったかな」

アリス「そうでもないみたいよ」

見ると、源三がもう来ていて、新しい
木材を運んでいる。
大志とアリス、近づいていき、
大志「おはようございます」
アリス「おはようございます」
源三、振り向き、
源三「（大志へ、ぶっきらぼうに）おう。
（アリスへ、優しく）おはよう」
アリス「早いんですね。それ（木材）どうす
るんですか？」
源三「あー、これはな――」
大志、待遇の差に首を傾げる。

○成田家・外（昼）
皆、縁側に座り、ラップで包まれたお
にぎりと、漬物を食べている。
アリス、いづみ、ヨウ、為吉、エプロ
ンに三角巾姿の房江、固まってワイワ
イしながら。
源三、少し離れたところで一人静かに。

大志、健太郎、さらにもう少し離れたところで話しつつ。

いづみ「ねぇねぇアリスちゃん、東京でデートっていったらどこ行くの？」

ヨウ「おっきいイオン？　この前テレビで観たの、（為吉へ）ね？」

為吉「いやありゃ千葉県の話だったろ」

アリス、微笑んで聞いていたが、答えながら段々寂しげな顔になっていく。

アリス「んー、どこだろう。んー、例えば、新宿で映画観たり？　表参道で買い物したり？　スカイツリー上ったり、代々木公園散歩したり、上野動物園とか、浅草の花やしきとか……」

大志、話の内容は聞こえていないが、ふと気になってアリスたちの方を見る。

アリスの横顔は暗いが、周りの皆は話に夢中で気づいていない。

大志、空になった紙皿を持って立ち上がり、アリスたちの方へ行き、

大志「房江さん、おかわりあります？　健太郎の分も」

アリス、目を上げて大志を見る。

大志もまた、目だけでアリスを見る。

房江「（お重を開けながら）あ、ちょっと待ってね。まだまだいっぱいあるのよ。中身がねぇ、梅、シャケ、たらこ、昆布、ハンバーグ、卵焼き」

大志「あ、じゃあハンバーグと卵焼き一個ずつ」

アリス「ハンバーグなんてあったの？　アタシも欲しい」

房江「ちょーっと形がアレなんだけどねぇ。上手く握れなくってぇ」

と房江、大志とアリスの紙皿に、丸型で大きめのおにぎりを乗せる。

アリス「形なんか気にしない。アタシ、ハンバーグ大好き」

大志、アリスに笑顔が戻ったことにホッとして踵を返す。

○使われていない灯台のある岬（夜）

雨が降っている。

○使われていない灯台・上部（夜）

美子、ムカデの入った虫籠の傍で目を閉じて座っている。

やがて目を開けて、立ち上がる。

○同・バルコニー（夜）

傘を差して出てきた美子、手摺に近づき、岬の際を覗く。

そこには涼が海を見て立っている。

美子「なにしてんだろ。（嫌悪感丸出しで）悲劇のヒロインみたい」

しばらく眺めて、何かを決意したように踵を返す。

○同・外（夜）

飛び出してくる美子。

涼の姿はもう無い。
美子、フードを被り傘を差し、涼のいた場所へ歩いていく。
そこから見える海は、雨のせいで荒れている。
美子、なんなんだろうな、としばらく眺めて踵を返す。
すると、灯台入り口の傍に涼が立っていて、こちらを見ている。
美子、驚いて固まるが、やがて、
美子「あなた、生きてる人？　それとも死んでる人？　幽霊？」
涼「……あなたこそ、どっちなんですか？」
美子「え？」
美子、聞き返されると思っておらず、不意を突かれて答えに詰まる。
すると涼、踵を返して行ってしまう。
美子「（独り言として）死んじゃってる……かな。〝あたし〟はね」

○ムカデの入った虫籠（夜）

食い荒らされたカエルの残骸。

大志とアリスの声「（幼稚園児風に）いただきます」

○野上家・茶の間（朝）

朝食の席。

ちゃぶ台の上にはサラダ、トースト、ゆで卵、カップのヨーグルト、手作り野菜ジュース。

合わせていた両手を解いてトーストを食べ始めるアリス。

大志、フォークを取り、サラダの小鉢を取り、中をよく見る。

キャベツが正方形に切ってあり、ピーマンは乱切り、ニンジンは分厚めの短冊切り、そこにマヨネーズがかかっている。

アリス「（悪気無く）食べないの？」

大志「これ、このままフライパンで炒めたら

旨そうだね」

アリス「それじゃあサラダじゃなくて野菜炒めになっちゃう」

大志「まあ、そうなんだけど」

大志、小鉢とフォークを置き、トーストを持って食べようとして、ん？　と裏側を見る。

裏側は焼けていない。

アリス「あ、それね、なんか上側しか焼けなくて」

大志「あー、たぶん、なんかその、トースターのつまみが？　両面焼きになってないんじゃないかな……あ、焼いてこようか」

大志、腰を浮かせてアリスの方に手を出すが、

アリス「ううん、大丈夫。上は焼けてるし」

大志「あー、そう」

大志、えー、と思いつつ腰を下ろす。

続いてゆで卵を取り、ちゃぶ台に打ちつける。

するとそれはほぼ生卵で、ぐちゃっと
中身が飛び出る。
アリス「あ（まずい）……あー」
大志「ごめんちょっと布巾取ってきてくれる？」
アリス「（焦って）ええ、ええ」
と立って出ていく。
大志、最後に、どうせ不味いんだろうなと思いつつ、汚れていない方の手で野菜ジュースを取って飲む。
一口、二口、三口目でゴフッとむせる。
口を押えて立ち上がり、駆け出ていく。
入れ替わりにアリス、
アリス「ごめんなさい、雑巾しか見つからなくて」
と、真っ黒な雑巾を手に戻ってくるが、
大志はもういない。

○成田家・外（昼）
アリス、源三、為吉チームと大志、い

づみ、ヨウチームで茶の間の床板を両
端から打ちつけながら、
為吉「（アリスへ）なぁなぁ、俺考えたんだ
けどよぉ、アリスちゃん、ここで喫茶店や
るってどうだ？」
アリス「喫茶店？　ああ、ここ元々そうだっ
たみたいね」
為吉「おうよ。椅子とかテーブルとか揃って
っからさぁ、コーヒー一杯四百円くらいで、
モーニングっての？　つけちゃってさぁ。
そしたら俺毎朝通うよ」
アリス「んー（でもアタシ料理下手だし）…
…」
　源三、釘を打つ手を止めて、
源三「いいんじゃないか。それで、改装にか
かった四十万、取り戻せばいい。俺も通う」
アリス「んー（確かにそれはアリかも）……」
為吉「なあ大志、お前はどう思う？」
　大志、釘を打つ手を止めて振り向き、
大志「はい？」

為吉「アリスちゃん、ここで喫茶店やっちゃどうかって」

大志、え？　と思ってアリスを見る。

目が合い、アリス、苦笑する。

その表情が、やってもいいかも、と思ってそうで、大志、マジで？　と思う。

○野上家・外観（昼）

にわか雨に降られ、走って帰宅する大志。

○同・玄関（昼）

大志「ただいまー」

と大志、駆け込んできて、体中の水滴を払いながら、

大志「アリスいるー？　ごめんだけどタオルーーー」

とここで、玄関の端にフェイスタオルが置いてあるのを見て、

大志「あ、いいや、なんでもなーい」

とタオルを取る。

○同・廊下～脱衣所（昼）

大志、頭を拭きつつ廊下を歩いていく。

茶の間のテレビが点いたままなのをちらりと見る。

脱衣所の引き戸を開ける。

するとそこにはアリスがいて、大志、

大志「うわっ、ごめっ！」

と、慌てて戸を閉める。

戸の方に背を向けて立っていると、戸を開けて、アリスが出てくる。

アリス「（笑って）そんなお化けでも見たみたいに」

大志「いや、ごめん。いるとか思ってなくて」

アリス「急な雨だったから、洗濯物急いで取り込んで。でも洗い直しかなって」

よく聞くと、脱衣所の中で洗濯機が動いている。

アリス「（笑って）別に脱いでたわけじゃな

いのに、そんな驚くこと……」

大志「（まだ戸惑っていて）いや……ごめん」

大志、廊下を歩いていき、階段を上っていく。

アリス、なんだろうなぁと思いつつ、その姿を見送る。

○同・二階・寝室（昼）

大志、髪を拭いていたタオルを取り、椅子の背にかける。

机の上でピコンとスマホが鳴る。

近づいていってスマホを取り、見てみる。

しばらくスクロールして、

大志「あ、アリス！　ちょっと！」

と、スマホを持ったまま急いで部屋を出ていく。

○同・茶の間（昼）

アリス、せんべい片手にテレビを観て

いる。
そこへドタドタと大志が走ってくる。
アリス「え、なに？　どうしたの？」
大志「これ見て」
と大志、スマホを見せて、
大志「ねぇアリス、この日、空いてる？」
アリス「なんなら毎日空いてるわ」
二人、顔を見合わせてニッとする。

○成田家・茶の間（昼）
新しい畳を皆ではめ込みながら、
いづみ「あらほんと？　見学者なんて何ヶ月ぶりかしらね」
大志「昨日メールが来てて、吉本さんってご夫婦なんですけど。なんか、来年の四月の、新学期に合わせて移住したいらしくて、田舎の村いろんなとこ見てんですって」
ヨウ「歓迎会するよね？　何の曲がいいかなぁ」
大志「あー、和楽器会の出し物ですよね、あ

んまり奇をてらわずに、一番得意な曲を全力で普通に演奏してください。ヨウさんたちほんと普通にやれば上手いんですから」

為吉「だよな。いつだっけ、鼓笛隊みたいに行進しながら弾こうとして、なんだ散々だったもんな」

いづみ「あたしはどうしようかな」

大志「商店、いい感じにしといてください。見学ルートに入れますんで」

いづみ「いい感じって？」

大志「値札を綺麗に作り直すとか、商品の種類を増やしてみるとか」

いづみ「わかった。わくわくするねぇ」

為吉「あ、いづみちゃん、商品増やすならアレ入れてくれよ、ナントカ編隊ムカデウエハース、っての？　健太郎が欲しがってて」

いづみ「（怪訝そうに）変態ムカデウエハース？」

源三「いらんいらん、こないだアマゾンとやらでたんと買っとったろ」

大志「じゃあ為吉さんと源三さんは、会場の設営とかその他いろいろで。料理は房江さん――」

アリス、元気よく手を挙げる。

大志「（不本意だけど）――とアリスがやるって言ってて。ご夫婦の送迎と案内は、俺と村長でやりますんで」

為吉「（からかって）送迎？　車の手配はまた村長か？」

大志「（笑って）俺がやります。軽トラで出迎えなんて、相手がヤギならいいですけどね」

○村内のどこかの草地（昼）

二匹のヤギ、草を食べている。

一匹、顔を上げてこちらを見る。

○使われていない灯台のある岬（夜）

雨が降っている。

○使われていない灯台・上部（夜）

ムカデの入った虫籠が置いてあり、中でムカデがカエルを捕食している、が、そこに美子の姿は無い。

○同・バルコニー（夜）

傘を差した美子、じっと一ヶ所を見下ろしている。

視線の先には涼がいて、海を眺めている。

美子「（苛ついていて）そっちになにがあるっての。馬鹿みたい……男のくせに（若い男なんて横暴で欲にまみれたケダモノだ。そんな雨に濡れた子犬みたいな茶番を演じるな）」

すると涼、ゆっくりと振り返る。

美子、ああ帰るんだな、と見ているが、

涼、不意に美子の方を見上げる。

美子、ぎくりとして固まる。

数秒の後、涼、正面に向き直って歩い

ていく。

美子、ホッとして体の強張りが解ける。

○同・外（夜）

美子、帰ろうとして扉を出てくる。

足元のコンクリートに、白い石を擦りつけて書いたような文字がある。

『何が見えた？』

美子、不快そうに顔をしかめ、足元の周囲をきょろきょろ探す。

そして白い石を拾う。

その石でコンクリートに書いていく。

『変な男』

○街路樹の幹（昼）

セミがとまって鳴いている。

○町中（昼）

白いワゴン車が大通りを走ってきて、信号で停まる。

わナンバーである。

○ワゴン車の中（昼）

ポップスのＣＤがかかっている。

運転席の大志、しばらく真っ直ぐ走り、やがてハンドルを切ってどこかへ入っていく。

○ももぎり村の最寄駅・外観（昼）

大志のワゴン車が入ってきて、駅の出入り口の方を頭にして駐車する。

○ワゴン車の中～駅の駐車場（昼）

大志、ハンドルに凭れ、駅の出入り口を見て待っている。

そのうちＣＤに合わせて女声で鼻歌を歌い始める。

やがて吉本聡（３５）、吉本葵（３３）が駅から出てくる。

大志、車外へ出て、吉本夫妻へ駆け寄

っていく。

大志「こんにちは、野上です」

聡と葵、気づいて、

聡「（陽気に）あ、どうも吉本ですー」

葵、丁寧に会釈する。

大志「遠いところをどうも。あ、車、あっちなんで」

と案内しながら、

聡「わざわざ迎えにきていただいて」

大志「タクシー使うと四千円かかるんですよ」

○百々霧村へ向かう林道（昼）

大志のワゴン車が走っていく。

○ワゴン車の中（昼）

運転席に大志、その後ろに葵、その横に聡。

大志と聡、話していて、葵（人見知りっぽい）、静かに頷くだけ。

大志、葵の様子をバックミラーで気に

しつつ、

大志「自分はまだ、移住してきて一年ちょっとなんですけどね、いい村ですよううちは」

聡「ブログ拝見してます。皆さん仲が良さそうで」

大志「（笑って）仲はほんといいんですよ。この手の村には珍しいと思うんですけど、みんな新しい人が好きで、すぐ世話焼きたがるというか」

聡「（嬉しそうに）へぇ」

大志「自分も笑ったんですけどね、引っ越してきた翌朝、玄関開けたら、何人分だよって量の貢ぎ物があって。野菜とか米とかなんですけど、いや米なんか、三十キロの米袋がドンッて立ててあって。で鶏が一羽、その米袋に繋がれてて」

聡「（笑って）鶏」

大志「しかも卵産んでたんですよ。まぁ卵はありがたくいただくとして、鶏本体はどうしろってアレだったのか」

聡「どうしたんですか？」

大志「飼ってましたね、しばらくの間。で、そういう朝のプレゼントが一週間に一回、何か月か続いたんです。いやあ、ごんぎつねかと思いましたね」

聡「（ふざけて）『ごん、お前だったのか』」

大志と聡「（ふざけて）『いつもくりをくれたのは』」

と、二人でプッと吹き出して、

大志「で、ある朝、『あれ、今朝は鶏鳴いてないなぁ』と思って玄関開けるじゃないですか、（笑って）そしたら、クリスマスとかによく出てくる、チキンの丸焼き？　そんな感じのが……」

聡「置いてあったんですか」

大志「まぁそうですね」

とその時、葵が何か言いたげに、あ、という顔をする。

大志、バックミラーで気づいて、あ、この話はマズったかな、と思う。

すると葵、

葵「（小さく）笠地蔵……」

やや間があって、

大志「あ（と気づく）」

聡「あ（と気づく）」

葵「（少し大きく）笠地蔵、も似てますよね」

大志「そっちのがいいですね」

聡「ごんぎつねだと、ごん、最後死んじゃいますもんね」

大志「まったく縁起でもないですね」

○百々霧村・村の入り口（昼）

『ようこそ』と書かれた風船アーチがあり、その下を通り抜けていく大志のワゴン車。

○同・集会所・外～ワゴン車の中（昼）

飾りつけらてた集会所の前に和一が立っている。

大志のワゴン車が入ってきて、和一の

前に横付けする。
和一、ワゴン車の後部ドアを開ける。
和一「どうもどうも、村長の甘利です。長旅お疲れさんでした」
聡と葵、車を降りながら、
聡「吉本です。今日はよろしくお願いします」
和一「ええ、ええ。よく見てってください。じゃ、まずは中へ」
大志、和一が聡と葵を連れていくのを車内から見守っている。
三人が入っていってしまうと、ふうっと息をつく（あー気を使った）。

○集会場・広間～廊下（昼）
飾り付けられた畳張りの広間。
ハワイアンなＢＧＭが流れている。
前方には舞台が有り、舞台後方には『歓迎　吉本ご夫妻』と書かれた看板が吊ってある。
舞台の上袖に源三、下袖に為吉が待機

している。

広間中央に座卓と座椅子があり、ハワイアンレイを首から下げた聡と葵が座っている。

その傍に和一が膝をつき、歓談している。

大志、広間へ入ってこようとする。

すると、大志の横をすり抜けるようにして、盆を持ったアリスが入っていく。

盆の上には緑色のドリンク。

大志、まさか、と思って、

大志「あ、アリス」

だがアリス、すでに膝をついていて、ドリンクを夫妻の前へ。

アリス「どうぞ。無農薬野菜とヤギの乳で作ったジュースです」

大志、

大志「なんでお茶じゃないんだよ……」

と、引きつつ見守る。

聡「わぁ、健康に良さそうな色ですね」

葵「（不思議そうに）ヤギの乳……」

聡と葵「いただきます」

聡と葵、一気に半分飲んで、

聡「うまい」

葵「これ、どうやって作ったんですか？」

アリス、ご満悦で、

アリス「これはですねぇ、まずピーマンを――」

大志、信じられない、と見ている。

その時、廊下の方から盛大なくしゃみが聞こえてくる。

大志、気になって廊下へ出てみる。

すると、そこには舞台袖へ移動中の和楽器会の面々（ヨウを含めて五人。全員着物姿）が。

しかしヨウだけ立ち止まって、健太郎に三味線を持たせて鼻をかんでいる。

健太郎「大丈夫かよぉ」

ヨウ「うーん」

大志「風邪ですか？　演奏、いけます？」

ヨウ「うん、平気。今日のために練習したんだもん。ありがとね、健ちゃん」

とヨウ、三味線を受け取って行ってしまう。

健太郎、大志を見上げて、ほんとに平気なのか？　と疑いの表情。

大志、健太郎を見下ろして、どうかなぁ、と首を傾げる。

とそこへ、広間からアリスが出てくる。

大志「あ、アリス、ちょっと」

アリス「なに？」

大志「さっき、二人に出したあのジュースって、いつも朝作ってくれるアレと同じ？」

アリス「そうよ。それがなに？」

大志「……いや、ごめん、なんでもない（俺の味覚がおかしいのだろうか）」

アリス、不思議そうにしながら行ってしまう。

と、広間から女子十二楽坊の『自由』のイントロ（ＣＤ）が流れてくる。

大志、ぎょっとして広間へ戻る。
と同時に、演奏が始まる。
広間は暗く、舞台の上で演奏する五人（ヨウがセンター）の上で、ミラーボールが回っている。
大志、ハッと笑い、
大志「なんだこりゃ……」
舞台上でヨウ、一心不乱に弾きながら鼻をむずむずさせている。
源三、上袖でヘッドホンを片耳に当て、ＣＤの音量を確認している。
為吉、下袖で曲に合わせてミラーボールに当たるライトの光量、色、光り方を変えている。
聡と葵、そこそこ楽しそう。
大志、諦めてその場にあぐらをかく。
すると間奏になって、上袖から着物を着たいづみが出てきて日本舞踊を踊り始める。
大志「いやアンタ店はどうしたんだよ……」

いづみの着物の袖が、ヨウの鼻先をふわっと舞う。

するとヨウ、ついに耐えきれず、

ヨウ「ふあ、ふあ、ふあっくしょん！」

ヨウの口から入れ歯が飛び出て畳の上に転がる。

大志だけがそれに気づき、唖然とする。

曲が終盤に差しかかる。

上袖から健太郎が出てきて舞台下に下り、立膝をつく。

同じタイミングで和一、下袖側の舞台下に移動して立膝をつく。

大志「いやお前らもグルかよ……」

曲のラスト、最後の一音のタイミングで健太郎と和一、隠していたバズーカ型クラッカーを出し、発射させる。

大志、うわ、と顔をしかめる。

飛び散るビニールテープ。

唖然として固まる聡と葵。

ミラーボールが消えて、照明が点く。

聡と葵、正気に戻って拍手をし出す。

大志、ビニールテープの絡まった入れ歯を見てハッとして、

大志「じゃあ吉本さん、時間も限られてますんで、そろそろ外行きましょっか。はいはい、どうぞどうぞ」

と、聡と葵を広間の外へ促す。

聡、促されながら、

聡「良かったですよ。なんか高校の学園祭みたいで」

大志「そうですか」

聡「どういうテーマでこれを？」

大志「カオスですかね」

葵「『芸術は爆発だ！』」

○空き家1・外観（昼）

蝉が鳴いている。

○同・階段～玄関（昼）

大志、和一、聡、葵、二階から階段を

下りてきて玄関で靴を履くまでの中で、

大志「どうですか？　悪くはないでしょう？　目立って傷んだ箇所も無いですし」

聡「（なんとなく気乗りせず）そうですねぇ」

大志「うちの村で空き家っていったら今現在、ここか、もう一か所くらいなんですよね。といってももう一カ所の方はちょっと、あんまりオススメできなくて」

聡「どうしてですか？」

大志「水はけの悪い土地なんです。よく虫が出るんですよ」

聡、どうする？　と葵を見て、葵、頷く。

聡「そっちも見せていただくことってできます？」

今度は大志がどうします？　と和一を見て、和一、

和一「お見せする予定じゃなかったんで、中はちょっとアレなんですが、それでもよければ」

大志「……ご案内します」
と大志、玄関を開けて外へ出る。

○村内の道（昼）
大志を先頭に歩いていく四人。
大志「疲れたら言ってくださいね。あとお手洗いとか。大体どこの家でも借りれるんで」
葵、目を気にして歩みが遅くなり、やがて立ち止まる。
聡「ん、どうした？」
大志「どうしました？」
和一「目が痛いのか」
葵「なんか、コンタクトにゴミが」
聡「目薬なんかも借りれたりします？」
大志「あーそれは、衛生的にどうなんでしょうね」
和一「いづみの店にならあるだろ」
大志「そうですね。（半笑い）大丈夫かな、さっき踊ってたけど……」

○伊藤商店・外観～店先（昼）

ディスカウントストアのドン・キホーテを模した外装になっている。

同じくドンキを模したＢＧＭが流れている。

大志、和一、聡、葵、やってきて、大志はうわ、と引き、あとの三人はすごい、と目を輝かせる（葵は片目を押さえつつ）。

○同・店内（昼）

同じくドンキを模した圧縮陳列と派手なポップ。

ムカデレンジャーのウエハースも仕入れてある。

大志、和一、聡、葵、商品に当たらないように気をつけながら入ってくる。

大志「いづみさーん、いますー？」

すると店の奥の方から、

いづみ「（チャラい感じで）はーい、いらっ

しゃいませーっ」

と声だけ聞こえてくるが、いづみの姿は見えない。

大志「あのー、目薬探してるんですけどー」

いづみ「はいはーい、目薬ですねー」

と、ここで店の奥から、商品を掻き分けるようにしていづみが現れる。

いづみ「（聡と葵へ）何でも揃う伊藤商店へようこそー。（大志へ）目薬は確か十二種類入荷してるー。えーっと、どこやったかなぁ」

大志「コンタクトしてても使えるやつがいいんですけど」

いづみ「あ、それはねぇ……（考えて）あったわ一種類。ちょっと待ってて」

いづみ、商品を掻き分けて店の奥に戻っていく。

その場に立ち尽くす大志、和一、聡、葵。

○百々霧村上空（昼）

青い空に白い雲が流れている。

○伊藤商店・店内（昼）

変わらず立ち尽くす四人。

大志、あとの三人の様子をチラッと確認して、

大志「いづみさーん、どうですー？　アレなら俺も探しますけどー」

だが返事が無い。

葵、ふと横を見て、そこにコンタクト用の目薬があるのを発見。

葵「あ」

聡「ん？」

大志と和一、葵と聡を振り向く。

葵、目薬を手に持っていて、

葵「これ……」

大志と和一「……」

○レジカウンターの上（昼）

７３９円と目薬の空箱、『いづみさんへ　これ買いました』と書かれたメモが置いてある。

○村内の道（昼）

大志を先頭に歩く四人。

和一、西の空を見上げて、

和一「なんだか雲行きが怪しいな」

聡「予報では、一日晴れだったんですけどね」

大志「この辺りの天気は変わりやすくて、よく突然雨が降るんです」

葵「（おっとりと）そっか……だから野上さん、レインシューズなんですね」

大志「え？」

大志が履いているのはスニーカーに見えるレインシューズである。

大志「（驚き気味に）よく気づきましたね、スニーカー風レインシューズ。９９％バレないってレビュー見て買ったんですけど」

聡、肘で葵を小さく小突く。

葵、ハッとして、

葵「あ、いえ、知り合いが同じの履いてて」

大志、何か引っかかるなと思いながらも、

大志「あー（なるほど）」

と、適当に微笑む。

○空き家2・外観（昼）

林の影になっていて暗く、空き家1より数段ボロい。

庭は草ぼうぼう、外壁は染みだらけ、屋根瓦が崩れ落ちていて、雨戸は半壊、窓は割れている、錆びた自転車やじょうろが放置されていてホラーな雰囲気。

大志の声「結構あちこち崩れちゃってて。前の住人が出てってから、一切手入れしてないんですよね。雨漏りとかもしてるかも」

○同・玄関ポーチ～台所（昼）

大志、和一、聡、葵、立っていて、

大志「中もまあ酷いんですが」

大志、玄関の引き戸を開ける。

聡「鍵、無いんですね」

皆で中へ入りつつ、

大志「そうなんですよ。元々あった鍵は、住んでた人が引っ越すときに持ってっちゃって。まあ、仮にあったとしても、意味が無いっていうか。あちこち壊れてるんで、入りたい放題。あ、靴のままでいいですよ」

大志、靴を脱ごうとした聡と葵を制して靴のまま家の中へ上がる。

皆で廊下を歩いていきながら、

大志「蜘蛛の巣とか気をつけてください。あと壁触んない方がいいかも」

葵、ハッとして壁から離れる。

壁にはあちこち小さな虫が張りついている。

台所へ辿り着き、

大志「まあ、こんな感じです」

聡「（あまりの汚さに）うわぁ」

葵、顔をしかめつつ、台所中を見回す。
大志、足元をムカデが通っていくのを
冷静に見送りながら、
大志「（淡々と）他のところも見てみます？
居間とか、風呂場とか」
和一「よせよせ。気分が悪くなるだけだ。
（聡と葵へ）ほらお二人さん、出た出た」
と和一、聡と葵を押して台所を出ていく。
大志もそれに続こうとするが、ふと台所を振り返る。
床をまだムカデが這っている。
大志、じっとそれを見る。

○同・玄関ポーチ（昼）
和一、聡、葵、曇り空を見上げている。
そこへ大志、遅れて出てくる。
和一「降り出しそうだな」
大志「戻りましょう。（聡と葵へ）食事の用意をしてますんで――」

○同・台所（昼）

床にて、包丁を頭に突き立てられたムカデ、足を動かして蠢いている。

大志の声「――よければ食べてってください」

いづみとヨウと為吉の声「（馬鹿笑い）あっはっはっはっはっは」

○集会所・居間（夜）

外は雨。

宴会が開かれている。

和一、いづみ、ヨウ、為吉、聡と葵の傍で歓談している。

和一「ほうほう、去年の冬に入籍かぁ。ってことはまだ新婚さんだなぁ？」

いづみ「（聡らの仲を茶化して）若いっていいわねぇ」

ヨウ「うんうん」

為吉「で今、東京のどこ住んでんだって？」

聡「青山です」

為吉「ひー洒落てんなぁ」

源三、少し離れて静かに飲んでいる。

健太郎、源三の傍で唐揚げを食べながら携帯ゲーム機で遊んでいる。

エプロン姿のアリス、大皿を二つ持ってきて、

アリス「はーい皆さん、房江さんの手羽煮と百恵さんの酢豚が来ましたよー」

とテーブルに置き、聡と葵へ、

アリス「どんどん食べてくださいね。（聡の茶碗が空なのを見て）あ、味ご飯おかわりどうですか？」

聡「（茶碗を差し出しつつ）すいません」

葵「（小さく）あの、お手洗いって……」

アリス「（小さく）廊下に出て、左の方にありますよ」

葵「ありがとうございます」

葵、立ち上がって出入り口の方へ。

アリス、テーブルの上のおひつを開ける。

○同・台所～廊下（夜）

大志、徳利とおちょこの乗った盆を持って台所から出てくる。

するとちょうど、広間から出てきた葵がトイレとは逆の玄関の方へ歩いていく。

大志、不思議に思うが、そのまま広間へ向かう。

○同・広間（夜）

大志、入ってくる。

為吉、大志の持つ酒を見て、

為吉「おうおう、こっちこっち」

大志、為吉に盆ごと手渡しながら、

大志「あれ、葵さんは？」

アリス、立ち上がって大志の耳元へ、

アリス「お手洗い」

と、広間を出ていく。

大志、ふーん、という顔をする。

○百々霧村・村の一部の光景（夜）

雨が降りしきっている。

○集会所付近・あぜ道（夜）

ビニール傘を差した葵らしき女、背を向けて立っている。

スマホで何か話している様子である。

そこへ背後から、誰かが足音を立てずに近づいていく。

初めはゆっくりと、次第にスピードを上げて、誰かは、葵らしき女の真後ろまでやってきて、その肩に手を伸ばす。

ハッとスマホを下ろして振り向く葵。

そこにいたのは（手を下ろしている）大志である。

大志「こんなところでどうしたんですか？濡れますよ。あなたの靴はレインシューズじゃないでしょう？」

葵「……ちょっと、電話をしていて」

大志「そうですか。気をつけてくださいね、こんな限界集落にだって、危ない人はいるかもしれませんし」

葵「危ない人？」

大志「（間髪入れず）例えば俺とか。（笑って）なんてね。でも、雨の夜になんか出歩くもんじゃないですよ」

葵「はい。（電話が）終わったらすぐ戻ります」

大志「ええ」

薄っすらと微笑む大志。

○集会所・外（夜）

雨が降っている。

エンジンのかかったワゴン車が、玄関に横付けしている。

大志、その中で待っている。

そして、聡と葵が皆に見送られながら出てくると、車内からそれを横目に見ている。

和一、外から後部座席のドアを開ける。

聡「（和一と皆へ）ありがとうございました」

葵「（和一と皆へ）ごちそうさまでした」

乗り込む聡と葵。

和一「じゃあ、気をつけて。色よい返事を期待しとりますんで」

聡と葵、会釈する。

和一、ドアを閉めて離れる。

車が動き出し、前の道へ出ていく。

それを見つめる和一。

その背後で、アリスもまた、何か思うところがあって車を見つめている。

○町へ向かう林道（夜）

大志のワゴン車が走っていく。

○ワゴン車の中（夜）

聡、窓外を見ながら、

聡「楽しい一日でした。……だからかなぁ、こうやって雨の中を走ってると、すごい空

しい気持ちになって」

大志「（笑って）寂しいんでしたら、引っ越してきてくださっていいんですよ」

聡「（曖昧に笑って）そうですね」

大志「もしもあなた方が、本当に夫婦だったらの話ですけど」

聡と葵、バックミラー越しに大志を見る。

大志の目は前方の道を見ている。

だがその目がふっと背後の二人に向けられて、

大志「（ケロッとして）え、なんですかそんなじっと見て。俺今なんか言いました？」

聡と葵、大志を見たまま何も言えない。

○百々霧村の最寄り駅・出入り口（夜）

大志のワゴン車が横付けしている。

聡と葵、外に出ていて、聡、後部座席のドアを閉める。

運転席に会釈をし、踵を返して駅の中

へ入っていく。
大志のワゴン車が走り出す。

○使われていない灯台のある岬（夜）
雨が降っている。

○使われていない灯台・上部（夜）
美子、虫籠の中でムカデに捕食されるカエルを眺めながら、
美子「『可哀想に。雨の夜になんか出歩くからこんな目に遭うんだよ』」
すると二回目で、葵と聡の声がやや遅れてずれるかたちで聞こえてくる（美子の記憶の中の声）。
美子「『可哀想に』」
葵の声「可哀想に」
美子「『雨の夜になんか出歩くからこんな目に遭うんだよ』」
聡の声「雨の夜になんか出歩くからこんな目に遭うんだよ」

美子、目を閉じる。

葵の声「やめなさいよ、被害者のことそんな風に」

聡の声「そりゃ本人の前では言わないさ。でも思っちまう。コレ系のヤマじゃ毎回」

葵の声「女は危機感が無いって？」

聡の声「実際そうだろ。全員とは言わないが」

葵の声「私も思うわ。性犯罪者に情けはいらない。全員アレを切り落とせって」

美子、ゆっくりと目を開ける。

○同・外（夜）

美子、扉から出てくる。

足元に、小石を重石にして四つ折りの紙が置いてある。

中を開いて見てみると、

『〝変な女〟が見えたら、そのときは教えてください』

美子、四つ折りの紙を持って灯台の中へ戻っていく。

しばらくしてまた出てくると、広げたままの四つ折りの紙を足元にバンと置き、重石を乗せる。
そして傘を差して行ってしまう。
涼の書いたメッセージの裏面に『教えてほしけりゃ聞きに来い』と書いてある。

○百々霧村の自然（昼）
稲が頭を垂れており、そこに赤トンボがとまっている。

○成田家・外観（昼）
『軽食・コーヒー　みやこ』の立て看板が『カフェ・アリス』に代わっており、家は修繕されて、庭も綺麗になっている。
大志の声「それでは――」
茶の間、廊下、台所、風呂、トイレ、寝室、すべて綺麗に直っていて、

大志の声「――成田家完成のお祝いと、今後の『カフェ・アリス』の繁盛を願いまして――」

○同・カフェ店舗内（昼）

一同「カンパーイ」

大志、アリス、和一、房江、いづみ、源三、ヨウ、為吉、健太郎、百恵が集まっており、それぞれ酒やジュースのグラスを掲げたあと、近くの人とぶつけ合う。

テーブルにはサンドイッチ、焼きそば、フライドチキン、フライドポテト、サラダ、シフォンケーキが並んでいる。

アリスと大志、カウンターの中へ入っていき、エプロンに首を通して、互いに、

アリス「はい、後ろ。（大志の背中の紐を結んで）できた。アタシもやって（と背中を向ける）」

大志「（アリスの背中の紐を結んで）オッケ」

いづみ、ヨウ、為吉、百恵、にやにや見ている。

源三、嫉妬でぶすっとして酒をあおる。

アリス「（ハンチング帽を被りながら）みんな遠慮しないでたくさん食べてね。メニューにあるものならなんでも作るわよ、（付け加えて）大志さんが」

大志「（ハンチング帽を被りながら）時給２９８円です」

百恵「よく引き受けたわねぇ」

大志「皆さんの寿命が俺は惜しいですからね」

百恵「？」

為吉「なんだぁ？　アリスちゃんじゃなくて大志の手作りかよ」

アリス「料理はまだ修業中なの。ドリンク系は上手いのよ？」

大志「（その辺を適当に片づけながら）スタバでバイトしてたんだって」

老人一同「おお」

いづみ「あたし知ってる。都会にだけある、お洒落な喫茶店でしょ？　注文は英語でしなきゃいけなくて、確か、タール、グランパ、ベントー（弁当のアクセントで）」

大志「（ボソッと独り言）トール、グランデ、ベンティだけど……」

アリス「そうよ（適当）」

いづみ「すごぉい」

アリス「アタシ、ラテアートだってできるんだから」

老人一同、ラテアートがわからず、？と顔を見合わせる。

百恵「えーすごい。どんなの描くの？」

アリス「動物とか、花とか。あと似顔絵も」

ヨウ「絵？　絵を描くの？」

アリス「ええ。カプチーノの泡の上に（フリをしつつ）こうやって、爪楊枝でね。上手よ？　国内の大会で三位入賞したことあるの」

大志「（……！）」

ヨウ「あたしそれがいい」
皆、続いてあたしも俺も、と。
○同・テーブルの上（昼）
ラテアートでそれぞれの似顔絵が描かれたカプチーノが人数分置いてある。
アリスと大志以外「わぁ」
○同・カフェ店舗内（昼）
大志、カウンターに立って、ワイワイ騒ぐ皆を眺めている。
手にはアリス特製野菜ジュース。
皆を見る片手間にすんなり飲み干して、最後に一瞬ウッと渋い顔。
なんだかんだで慣れてきたなぁ、と思いながらグラスを見つめる。
アリス、いつの間にかそばに来ていて、
アリス「なんで不味いか教えてあげよっか」
大志「（不味い自覚はあったのか、と意外に思いつつ）うん。なんで？」

アリス「あなたの分だけ特別だから」
大志「（特別？）」
アリス「虫が入ってるの。（大志の反応を見つつ）ミドリムシ」
大志「（笑って）知りたくなかったな」
アリス「栄養あって、すごい体に良いのよ？」
大志「へぇ……」
　アリス、大志の反応を注視していたが、
アリス「……嘘」
大志「え？」
アリス「ミドリムシなんて入れてない」
大志「（苦笑して）なんでそんな嘘つくの」
アリス「なんでだと思う？」
大志「知らないよ」
アリス「じゃあなんでアタシが、あなたのジュースをわざと不味く作ってたと思う？」
大志「（マジか、と引きながら）わかんない。（冗談で）俺、嫌われてんの？」
アリス「……（ちゃんとよく考えて、と無言で）」

大志「あんま期待すんなよ。男はみんな鈍感だぞ？」

アリス「そうね。でも女はみんな、それをわかっていながら、やっぱり気づいて欲しいのよ。好きとか嫌いとか嬉しいとか悲しいとか……（小さくて聞こえない声で）〇〇（助けて）とか」

大志「え？」

アリス「『あれ？』って思ってほしかったの。『なんか変だぞ？』って。でね、『お前、なんかおかしいぞ』って、あなたに言ってほしかった。それだけよ。それだけのこと」

大志、意味がわからず、

大志「……アリス、酔ってる？」

アリス「（どこか寂しげに）ええ、アタシ、酔ってるわ」

〇同・テーブルの上（昼）

メニューが無造作に置かれている。

様々なドリンクメニューの中、『特製

野菜ジュース　４８０円（税込）』とあり、説明として、『朝の目覚めに！※ベースの牛乳は、豆乳にも変更できます。』とある。

○使われていない灯台のある岬（夜）

雨が降っている。

○使われていない灯台・上部（夜）

美子、座っていて、虫籠の中でムカデがカエルを捕食するのを眺めている。

すると、誰かが階段をゆっくり上ってくる足音がする。

やがてその足音が、美子のいる場所まで上がりきる。

やってきたのは涼である。

美子、ずっとムカデを見ていて、気の無い感じで、

美子「ほんとに来たんだ？」

涼「来いって書いてあったんで」

美子「見てないよ、変な女なんて」
涼「……そうですか。……それ（虫籠）」
美子「あたしのペット」
涼「（虫籠に近づいて）ムカデ……とカエル？　（嫌そうに）飼ってるんですか？」
美子「うん」
涼「（嫌そうに）なんでムカデ……」
美子「大っ嫌いだから」
涼「……なるほど。いい性格してますね」
美子「そう？　ありがと」
涼「別に褒めちゃいないですけど」
美子「うん。なんでかなぁ？　って自分でも思うわけ」
涼「はぁ」
美子「大っ嫌いなのに、愛おしいの。たくさん食べて大きくなるんだよ、って思いながら、今すぐにでもこの長い胴体をね、ハサミでチョキンてしたくなる」
涼「……これは人の受け売りなんですけどね、物事はすべて、表裏一体なんです。大っ嫌

いって気持ちは、きっと愛おしいとセットなんですよ。お汁粉に砂糖、入れるじゃないですか。で、ちょっとだけ塩も入れますよね。そうすると、甘さが引き立つじゃないですか」

美子「（涼を振り向いて）大っ嫌いが砂糖で、愛おしいが塩？」

涼「ええ。大っ嫌いが砂糖で、表。愛おしいが塩で、裏。表裏一体。表があれば必ず裏がある。裏のない人間なんて薄っぺらです。裏地の無いコートほど安っぽいものはないでしょう？」

美子「……」

涼「僕は持ってますけどね、裏地の無いコート」

美子「あたしも持ってる」

二人、互いにじっと見て、フッと吹き出す。

涼「ネットで間違えて買ったんです」

美子「あ、同じく。なんか、写真と実物が全

然違ってて。サイトもっかい確認してみたら、すっごいちっちゃい字で『写真はイメージです』って書いてあるの。なんじゃそりゃって」

涼「……それなんて店です？」

美子「え（もしや同じ店？）」

○野上家・外観（昼）

○同・茶の間（昼）

大志、パソコンに向かっていて、村のブログをちょうど更新したところ。

内容は成田家完成のことで、十人分のラテアートが集合した写真が載せられている。

玄関の方で物音がして、大志、立ち上がってそちらへ向かう。

○同・玄関（昼）

大志、様子を見にやってくる。

玄関には段ボール箱が二箱とキャリーバッグが置いてあり、アリス、靴を履いて振り向いて、

アリス「あ、大志さん」

大志「（荷物を見て）なに、どうしたの？」

アリス「引っ越そうと思って」

大志「え？」

アリス「（笑って）だって、家は完成したんだし、いつまでもお世話になるのも……」

大志「でもあの家まだなんも無いだろ？」

アリス「そんなことないわよ。料理道具はカフェのがあるし、冷蔵庫も。あ、洗濯機は明日届くの」

大志「洗濯機があったって、どうせ洗剤も柔軟剤も買ってないだろ？　風呂にだってシャンプーもなんも無くて、カフェの手洗い場のやっすい固形石鹸で全部済まそうとするんだろ？」

アリス「（笑って）しないわよ。アタシのことどう見てるわけ？」

大志「じゃあテレビは？　もう買った？　録画機は？　朝ドラ撮り溜めてんの、アリスが観たいって言ったからだぞ？」

アリス「ごめんなさい、消しといて」

大志「あと冷蔵庫の食いかけのアイス」

アリス「あ、それはさっき食べといたわ」

大志「……」

アリス「（大志を意外そうに見て）なぁに、どうしたの？……もしかして、アタシのこと好きになっちゃった？」

大志「茶化すなよ。……友達だろ」

アリス「（ハッと気づかされて）そうね。ありがとう、大志さん」

大志「手伝う」

と大志、玄関へ下りてスリッパを引っ掛ける。

○同・茶の間（昼）

開いたままのパソコン。

十人分のラテアートの写真が載ったペ

ージを映している。

○とある小さな会議室（夜）

テーブルの上にノートパソコンがあり、百々霧村のブログの、ラテアートの写真のページを映している。

ノートパソコンの前に正体不明のスーツの男（実は吉本聡）が座っていて、別のウィンドウを開く。

そこには『第７回日本ラテアート選手権、現役大学生が表彰台に』と題した四年前の記事と写真が映っている。

写真は一位の女性を真ん中に、二位の男性、三位の涼がトロフィーを持って正面を向いて映っているもの。

写真の下の人物の説明の中に、『成田涼（２１）』と記載がある。

さらに、一位の女性の説明として『水元ありす（２６）』とある。

ドアの開く音がして、女のヒールの音

が近づいてくる。

女（実は吉本葵）、『百々霧村潜入捜査報告書』と題した資料をテーブルの上に放る。

資料には、『空き家に人の住んでいる形跡は無く、容疑者は村人の家で匿われているものと思われる』との記載。

女、男の肩に寄り添うように手を乗せる。

○テレビ画面（昼）

ニュース番組にて、女性アナウンサー、アナ「気象庁によりますと、太平洋沖で発生した台風１８号は、明後日早朝、九州に上陸し、その後、日本列島を縦断する見通しです」

○百々霧村・村の一部の光景（昼）

紅葉と、深く垂れた稲穂。

○同・田んぼ（昼）

和一、田んぼの持ち主夫妻、大志、アリスがあぜ道に立っている。

和一「（大志とアリスへ）じゃあ、頼むぞ二人とも」

大志「了解です（同時）」

アリス「了解よ（同時）」

妻「ありがとね。突然台風だなんて、自分らだけじゃあ、間に合やしないもの」

夫「バイト代弾むから、堪忍な」

大志「（笑って）時給２９９円以上の仕事なら、いつでも大歓迎ですよ」

アリス、夫妻に見えないように大志の脇腹を指で刺す。

大志「（声にならない）……！」

アリス「（素知らぬ顔で）稲刈り、昔からやってみたかったのよね」

妻「優しいねぇ、アンタらは。（夫へ）じゃあ早速お願いしましょうか」

夫「ああ。（大志へ）大志くんは、確か去年

やってたよな」

大志「ええ。適当に刈ってますんで、アリスの方見てやってください」

大志、鎌を取って移動し、田んぼに入る。

慣れた手つきで稲を刈り始める。

すると、ポケットから携帯のバイブ音が。

大志、軍手を外してスマホを見る。

『吉本さん』と表示されている。

怪訝に思うが、電話に出る。

大志「もしもし……あ、はい、その節はどうも。はい……はい。（アリスたちの方を確認して）ええ、それがなにか。……え？

（と顔色を変える）」

一方、アリスたち。

夫妻とアリス、田んぼに入っており、

アリス、掴んだ稲に鎌を当てていて、

夫「そうそう、そのまま引き上げるように」

アリス「（刈り取って）あ、すごい。簡単。

ねぇ大志さん、見てみて！　（と振り向くが、大志は消えていて）……あら？」

○百々霧村付近の道路（昼）

大志、周囲を気にしながらやってくる。

道の脇に黒のクラウン（覆面パトカー）が停まっている。

パンツスーツ姿の葵、助手席から現れて、大志、立ち止まり、二人の視線が静かにぶつかる。

○クラウン車内（昼）

運転席に聡、その後ろに大志、その横に葵。

大志、冷めた表情をしていて、

大志「知ってましたよ、刑事だってこと。東京で一度、お会いしたことがあります」

葵「私たちも、あのあと思い出しました。あなたは、野上美子さんですね、二年ほど前に、世田谷区で、被害に遭われた……」

大志「ええ。今は野上大志と名乗っています。二度、お会いすることになるとは思っていませんでした。ですから、こうして三度目があるなんて。……アリスが、なんだっていうんですか。わざわざ東京からやってきて」

聡「あなた方がアリスと呼ぶあの女性、本当に、成田アリスさんなんですかね」

大志「（怪訝そうに）え？」

聡「我々が今抱えているヤマ、事実をそのままお話しますと、半年ほど前、世田谷区で、成田涼という男と水元ありすという女が同時に失踪しているんです」

大志、葵から、涼とありすの証明写真、第7回日本ラテアート選手権の表彰式の写真、防犯カメラの写真を手渡される。

聡「彼らの姿を最後に捉えたのは、水元ありすの住むマンションの防犯カメラ。二人でマンションに入っていく姿と、数時間後、

一人でキャリーバッグを引いて出てくる成田涼の姿。そしてそれ以降、二人は行方をくらましている……」

大志「なんですかそれ。なにが言いたいんです」

葵「成田涼。水元ありす。成田アリス。なにか気にかかりません？」

大志「わかりますよそりゃ。成田涼の〝成田〟と、水元ありすの〝ありす〟で成田アリス。でもそれが……なんだって」

聡「成田アリスが、成田涼である可能性です」

大志「（笑って）馬鹿馬鹿しい。それで夫婦のフリなんてして」

葵「あれは潜入捜査でした。限界集落なんて場所は難しいんですよ。普通に刑事として行っても、大抵冷たくあしらわれるか、酷ければ嫌がらせを受けます」

聡「我々はあの日、百々霧村の、使われていない空き家に成田涼が潜伏していると踏んでいました。でも実際、二つの空き家のど

ちらにもその形跡は無かった。だから考えたんです。成田涼は、どこか村人の家に匿われているのではないかと」

葵「それで村人全員の住民票謄本を取りました。野上美子というあなたの本名を見つけて、二年前のことを思い出したのはそのときです」

大志「……」

聡「その結果、住民として名前が上がってこない人物が一人……それが、あなたの言う成田アリスです」

葵「成田アリスくらいの年の女性は、百々霧村には、あなた一人ということになっているんですよ」

大志「そんなの、住民票は実家に置いたままって人、五万といるじゃないですか」

聡「もちろんそうです。成田アリスという女性は実際に存在していて、住民登録は実家のある市区町村にしてあるのかもしれない。けれど疑わしければ、我々は捜査しなけれ

ばなりません」

大志「……で？　なんで俺にこの話を？」

葵「あなたに協力していただきたいんです」

大志「協力？」

葵「成田アリスを監視してください。まずは、彼女が男であるかどうか。不審な行動は無いか。持ちものや、携帯電話の履歴」

大志「（戸惑いを隠すように鼻で笑って）お断りします。なんでそんなこと、俺がしなくちゃいけないんですか」

聡「水元ありすは十中八九死んでいます。やったのは成田涼です。成田涼は、水元ありすを殺害後、死体をキャリーバッグで運び出し、どこかへ遺棄した。そして、正体を隠すために女装している」

大志「すいませんが、俺も暇じゃないんで

（とドアを開けて外へ出る）」

大志、足早に歩き去ろうとする。

葵、車から出てきて、

葵「悔しいじゃないですか」

大志、足を止める。

葵「水元ありすの部屋には、情事のあとがありました。悔しいじゃないですか、やるだけやって、殺されるなんて。同じ女として」

大志、葵の言葉に迷い、やがて振り向く。

○百々霧村・田んぼ（昼）

稲刈りをしている夫妻とアリス。

アリス、腰に手を当てて伸びをして、

アリス「あ、大志さん」

大志、あぜ道を歩いてきている。

アリス「ちょっとー、どこ行ってたのよー！」

大志、近くまで戻ってくる。

アリス「開始十分でバックレるなんて」

大志「ごめんごめん、なんか急に腹痛くなって。（夫妻へ）すいません」

妻「大丈夫？　アレだったら今日はもう」

大志「あ、やります。出したらスッキリしたっていうか」

夫「悪いなぁ。わしらも年々動けんくなって、正直なところ、四人でも間に合うかどうか」

大志「（軍手をはめながら）間に合わせます（アリスを見る）」

アリス「（大志の視線を受けて）もちろんよ」

○成田家・外観（夜）

カフェの入り口に『臨時休業　○日、○日』と書いてある。

○同・カフェ店舗内（夜）

アリス、たまごサンドを作っている。

完成して、皿に盛り、ラップをかけて家を出ていく。

○野上家・茶の間（夜）

大志、パソコン画面を見つめている。

画面には、水元ありすのフェイスブックのページ。

最新の投稿は約半年前で、薬指に婚約

指輪をした左手の写真と、『涼にプロポーズされました』とのコメント。

チャイムが鳴り、大志、パソコンを閉じ、テレビを点けて立ち上がる。

○同・玄関（夜）

玄関を開けると、サンドイッチを持ったアリスがいる。

アリス「作ったの、たまごサンド。一緒に食べない？」

大志「（驚きつつも、やがて）ああ」

○同・茶の間（夜）

サンドイッチを食べる大志とアリス。

アリス「久しぶりだわ。ここでこうして、あなたと二人」

大志「そうだな。一緒に暮らしてたのが、随分前な感じがして（突然ゴホッとむせる）」

アリス「（半笑い）あ、ごめんなさい。わさび、固まってた？」

大志「（むせつつ）わさび……！」
アリス「からしが無かったから練りわさびを
入れたんだけど、結構塊ができちゃって」
大志「お前わざとだろ」
アリス「違うわよ。これはほんとに違うから」
大志「老人ならショック死するレベルだぞ」
アリス「やめてよ。わさびで人殺しになんて
なりたくないわ」
大志「（ハッとして沈黙）……ほんと、アリ
スってさ、料理だけは上手くならないな」
アリス「でも大志さんは、毎回ちゃんと食べ
てくれる。友達だから。……友達だから？」
大志「ああ。友達としての、責任かな」
大志、たまごサンドを食べる。
激しくむせて、涙が流れだす。
アリス「大丈夫？　無理しなくても」
大志「（ぼろぼろ泣きながら）平気平気。こ
んなの全然、なんともないよ」
アリス、泣きながら食べ続ける大志を、
戸惑いながら見つめている。

○百々霧村・一部の光景（朝）

日の出前。

○あぜ道～田んぼ（朝）

アリス、稲刈りの服装でやってくる。

すると田んぼにはすでに誰かいて、稲を刈っている。

近づいてみると、それは大志である。

アリス「おはよう。早いのね」

大志「（体を起こして）おはよう。そっちこそ」

アリス、田んぼに下りて稲刈りを始める。

やがて日の出を迎える。

体を起こして朝日を眺める大志とアリス。

アリス「綺麗ね」

大志「（アリスの横顔をちらっと盗み見て）ああ、綺麗だな」

○朝日に輝く稲穂（朝）

アリスの声「アタシ、ここに来られてよかったわ」

○百々霧村・一部の光景（夜）

台風が来ていて雨風が強い。

田んぼはまっさらになっている（稲刈りが間に合った）。

○野上家・二階・寝室（夜）

暗闇の中、部屋着からワンピースに着替えて、大志は美子になる。

美子、鏡を見て唇にリップを塗る。

鏡の中の自分を、静かな決意を持って見つめる。

○同・外～家の前（夜）

玄関から出てくる、雨合羽にレインブーツを履いた美子。

強い風雨に目を細めて、フードを被って歩き出す。

家の前の通りを、フードを押さえながらしばらく歩いていたが、やがて早歩きになり、フードから手を放して走り出す。

フードが後ろへ落ちるが、気にせず駆けていく。

○使われていない灯台のある岬（夜）

美子、駆けてくる。

岬の際に涼が海を見て立っている。

美子、立ち止まり、

美子「アリス！」

涼、振り返る。

美子「見えたよ。〝変な女（アリス）〟が立ってる」

じっと互いを見つめる二人。

○使われていない灯台・上部（夜）

ＬＥＤランタンの明かりの中、美子と涼、離れて座っている。

涼「どうして、僕がアリスだと？　……大志さん（と美子を見る）」

美子「（大志だと気づかれてハッとするが、動じずに）あなたを追ってる刑事からそう聞いたの。……あなたは？　どうして、あたしが大志だって……」

涼「わかりますよ……だって友達だから」

美子「（真実を聞きたくて）……」

涼「……料理をするあなたの手。包丁を持って、野菜を支えて、トントントンって、切ってく手。あなたの手は、男の手じゃない」

美子「……そっか。もうずっと、バレてたんだね」

沈黙の中、風雨の音が際立って聞こえる。

美子「聞いてもいい？　……あなたは、水元ありすを殺したの？」

涼「……」

美子「彼女の、フェイスブックのね、最後の投稿を見たの。なんて書いてあったと思う？　『涼にプロポーズされました』って、左手の薬指に、婚約指輪した写真と一緒に」

涼「……」

美子「ねぇ教えて？　あなたが言ったみたいに、物事はすべて、表裏一体なの？　愛おしいと殺したいはセットなの？」

涼「……」

美子「それとも、愛してなんかいなかった？　ただヤッただけ？　ねぇ、あなたにとって、ありすはなんだったの？」

涼「……」

美子「黙ってないでなんか言いなよ。……（大志の口調で）言えよ。……なぁアリス！（と、立ち上がる）」

涼「……」

美子、涼に歩み寄り、胸倉を掴んで床に引き倒す。

上から押さえつけるようにして、

美子「このままじゃお前、捕まるんだぞ。ほんとにお前がやったのかよ？　違うんだろ？　なぁ？　ほんとは違うんだよな？」

視線が真っ直ぐぶつかっていて、

涼「あの場所に立って海を見ているとき、僕の隣にはいつも、ありすがいる。海の底に沈んだはずの、彼女がいるんです」

美子「……！」

美子、声にならず、涼の隣に倒れ込むように顔を伏せる。

ワンピースのポケットからボイスレコーダーが覗いている。

涼「大志さん。ずっと誰かに、気づいてほしかった。アリスが僕で、僕がありすを殺―」

美子、片手で涼の口を塞ぐ。

もう片方でボイスレコーダーの電源を切り、投げ捨てる。

涼の口を塞いでいる自分の手に、まるで唇にするように口づける。

美子「あたしはね、愛おしいと殺したいは、表裏一体だと思うよ。あなたが憎い。ありすを殺した……アリスを殺したい」

美子、涙がこぼれそうになり、涼から離れて背を向ける。

背後で涼、アリスとして、

涼「ごめんね、大志さん。嘘ついててごめんね。たくさん助けてもらったのに、悲しませて、ごめんね」

美子、嗚咽を堪えて涙を流している。

美子には背後に涼ではなく、アリスの姿が見えていて、

美子「（アリス、と言おうとして口を開くが、断念して口を閉じ、俯いて）……」

涼「（涼として）自首します。アリス（ありす）のために、泣いてくれてありがとう」

○百々霧村・一部の光景（朝）

台風一過の晴天。

○野上家・二階・寝室（朝）

ベッドで寝ている美子、目を覚まして、ハッと飛び起きる。

○成田家・カフェ店舗内（朝）

ドアを勢いよく開けて入ってくる大志。店内にはいづみ、源三、ヨウ、為吉、健太郎、その他村人数人がいて、カウンターの内側でアリス、

アリス「いらっしゃいませー（と入り口を見て）ってなんだ、大志さんじゃない。（時計を見て）十二分遅刻。時給６０円引いとくわね」

大志、アリスがいつも通りにカフェを営業していることに戸惑いと安堵が両方あり、それを誤魔化すように笑って、

大志「……なんだよアリス、けっちいなぁ」

健太郎「遅刻するのが悪いだろー」

大志「（カウンターの内側へ移動しつつ）うるせぇ、大人にはいろいろあってなぁ」

アリス「はいはい、おしゃべりはいいから（大志にエプロンを被せて）、はい、後ろ向いて（と背中の紐を結ぶ）」

老人らと健太郎、にやにやして見ている。

アリス、大志の頭にぽんっとハンチング帽を乗せる。

大志、それをきちんと被り直す。

健太郎「大志、オレ、ホットケーキ」

いづみ「あたしハムサンド」

源三「トーストとゆで卵」

ヨウ「あんみつ食べたい」

為吉「ホットドッグ、マスタード多めで」

アリス「みんな、あなたが来るのを待ってたのよ」

大志「（満更でもなく）はいはい、もう少々お待ちくださいませ」

○野上家・二階・寝室（昼）

ベッドに座って電話している大志。

大志「ええ、そうなんです。成田アリスは、全くボロを出しません。本当に女性なんじゃないかって。ええ。申し訳ないんですが、これ以上のご協力は。はい、データはあとで送ります。期待しないでくださいね、ただの日常会話です。他愛のない、平和な田舎の会話ですよ」

○成田家・外観～外（夜）

玄関にCLOSEDの札が掛かっている。

○同・カフェ店舗内（夜）

アリス「はい、どうぞ」

とカウンターに、美子の似顔絵の描かれたカプチーノが置かれる。

美子、その正面に座っていて、

美子「すごい。似てる気がする」

アリス「上手く描けてるでしょ？　実物の可愛さには及ばないけど」

美子「なにそれ（と照れて）。なんか、飲む

のがもったいないね、せっかく描いてくれたのに」

アリス「いいのいいの、ぐびっといっちゃって？」

美子、じゃあ、と口をつけて、

美子「あちっ」

アリス「ああ、気をつけて」

美子「（カップを置いて）……」

目が潤んでいる。

アリス「……大丈夫？」

美子「わざとでしょ」

アリス「？」

美子「わざと熱々で作ったんだ」

アリス「……違うわよ。え、違うわよ？」

美子「（笑って）何で焦るの。おいしい。ありがと」

美子、満面の笑みを見せる。

アリス、カウンター越しに身を乗り出し、美子の頬にキスをする。

アリス「あなたの笑顔が好きよ。男として生

きていても、女として生きていても、きっとあなたの笑顔は変わらずに、この村を、明るく照らしていくんだわ」

美子「（泣きそうな顔で笑って）うん」

アリス、にっこりと微笑む。

○町中（昼）

道路脇に黒のクラウンが停まっている。

○クラウン車内（昼）

カーナビでテレビニュースが流れている。

女子アナの声「半年前に行方不明となっていた、世田谷区に住む男女の事件で、今日未明――」

運転席から手が伸び、カーナビを消す。

それは聡である。

聡「自首って……なんだよそれ」

葵、助手席にいて、

葵「いいじゃないの。きっと私たち、無駄足

じゃあなかったわ」

葵、窓外の空を見上げる。

○青空に白い雲が浮いている（昼）

○使われていない灯台・バルコニー（昼）

空と海を見つめている美子。

ふと下を見ると、岬の際にアリスらしき後ろ姿が。

美子、ハッとして踵を返す。

○同・外（昼）

扉から飛び出してくる美子。

岬の際を見るが、もうそこには誰もいない。

美子「ありす……アリス……さようなら。ありがとう」

草むらに、蓋が開いて倒されている空の虫籠がある。

○百々霧村・全景（昼）

春の景色。

○同・村内各所（昼）

春の訪れを感じる光景の数々。

○同・成田家・外観（昼）

雨戸が閉まっており、カフェ店舗の入り口には『長期休業中』の張り紙。

○同・村の入り口（昼）

『百々霧村』と書かれた丸太看板がある。

タクシーが停まって、運転席から運転手の男が出てくる。

男、車の後ろへ回り、トランクから女物のキャリーバッグを取り出す。

次に、後部座席のドアを開ける。

ワンピースを着た美子が出てくる。

髪が伸びて女性らしくなっている。

左胸にバリスタのライセンスバッジをつけている。

周囲の緑や桜を見て、

美子「はぁ……ただいま」

運転手の男「それじゃあ」

美子「ええ、どうもありがとう」

美子、もう一度村の入り口を見る。

丸太看板の奥に、『美子ちゃん　おかえり』と書かれた風船アーチがある。

アーチの後ろから、いづみ、源三、ヨウ、為吉、健太郎が一人ずつ『バリスタ』『合格』『おめで』『とう！！』『（コーヒーカップの絵）』と書かれた紙を持ってひょっこり顔を出す。

美子、ハッと驚き、満面の笑み。

完